

愛液と混じり合った血、それは欲望の味がした。

平尾が、麻美の膣から引き出した指先を舐める。微かな鉄の味と愛液のぬめりが舌の上で溶けていく。

そのすぐ横では、天井から吊られたままの麻美が、中断され、苦痛に変わった快樂に低く、嗚咽の声を上げている。

平尾が彼女の後ろに回り込む。

「尻を突き出せ」

「ああ……許して……」

彼女が、哀願の声を上げながらも、背後に向けて紺色のスカートに包まれた尻を差し出すと、平尾は両手でその尻をつかみ、固い腰骨の手触りと、その下の柔らかい肉の弾力を楽しんだ後、裾をめくり上げた。

目の前に突き出された白いパンティに覆われた尻が平尾の欲情を刺激する。

腰のくびれからやわらかなカーブを描き、盛り上がる尻房。その肉の半球に張り付く白い下着と、よじれた秘肉を形を微かに浮かび上がらせている股間。

微かに香る汗の匂いと、こもった欲情の香りが、平尾を更に刺激する。

尻のカーブに沿わせるように、平尾が張り付いた下着をずり下ろしていく。

麻美が反射的に太股をよじり合わせるが、両手を吊られている彼女には抵抗らしい抵抗もできはしなかった。

下着を脚から抜き取った後、平尾は尻房をその形が歪むほどに強くつかみ、そして無理矢理に左右に押し広げる。

「ああ、イヤっ……」

男の目に背後から秘めた個所を覗き込まれる恥辱と絶望感に、麻美が泣き声で掠れた声を上げ、必死に抵抗する尻房が震えた。

白く分厚い肉の奥に、わずかにその口に愛液のぬめりを纏わりつかせている膣穴と、その下の、無数の皺によって囲まれた、翳った肉色をした肛門が見え、汗の香りよりもわずかに濃く異臭が香る。

「あああ……」

麻美が、自分のもつとも秘めた箇所注がれる平尾の視線を痛いほど感じ、尻をよじる。平尾が平手を尻房に叩き付ける。

「動くな！」

叫んだ彼の指が、尻房の中心で息衝いている肛門に触れた。

「うう……そんな……」

麻美が女の部分より先に、排泄器官に触れた事に強い恥辱を感じる。

「裂けてはいないようだな、まあ、昨日は充分にほぐしてからヤツてやったからな」

平尾の指がゆつくりと窄まりに埋まっっていく。

「い、イヤっ……」

自分のもつとも隠しておきたい恥辱の器官に潜り込んでくる指の、そのおぞましい感触に、筋肉が収縮し、小孔が強く窄まる。

指をグイグイと締め付けてくる感触に、平尾は淫らな笑みを浮かべて更に深く犯していく。

第二関節あたりまで挿入すると、その指は内部をまさぐるように動き出し、尻の内側の粘膜を擦り上げた。擦り上げた。

「イヤっ、イヤッ、イヤッ！」

麻美は、平尾の指の感触に頭を振り、ショートカットに整えられた髪が乱れる。微かなシャンプーの匂いが辺りに振りまかれる。

自分は今、両腕を吊られた姿勢で背後の男に尻を差し出し、そして肛門を嬲られているんだ……。

淫らな自覚が、彼女の脳裏にふと忍び込む。それは瞬く間に彼女の意識を支配する。

「ああ！」

平尾の指が、腸管の中のある一点に触れたとき、思わず声が漏れた。

なに？ なんなの今のわたしの声……。

ひよっとして……わたし……。感じているの……？

罪悪感を伴った感情が彼女を責め、そして駆り立てはじめる。

太股が再び強くよじり合され、その狭間に浮いた汗と、滲みだした愛液が混じり合う。熱く、濡れたような感触が太股の中心に沸き上がる。

そんな彼女の微妙な変化を感じ取った平尾が、指を更に奥に進めていく。暖かい固まりかけたゼーリの中に指を差し込んだ時のような感触が伝わってくる。

麻美が強く唇を噛んだ。

平尾の指がようやく彼女を開放した時、麻美は大きく息を吐き、身体をぐったりと弛緩させた。彼女の前にまわった平尾が、先ほどまで尻の中にあつた指を、麻美の鼻先に突きつける。

「いやっ！」

顔を逸らす彼女の頬に、平尾の平手が飛ぶ。

小さく悲鳴を上げた彼女が、じんと痺れるような痛みで涙を流しながらも顔を正面に向けなおす。

平尾が、その唇に指先を触れさせた。

「お前のものだ、舐めて綺麗にしろよ」

「イヤ……、そんな事、出来ない……」

「何故だ？」

「そんな……」

平尾が指を唇に押し付け、麻美が懸命に頭を後ろに引こうとする。平尾が指を離す。

「汚いものは、嫌か？」

「……はい」

「じゃ、どうすればいいんだ？」

麻美が押し黙る。

平尾が再び、彼女の唇に指を押し付ける。

「どうすればいい？」

「……き、綺麗に……して」

平尾がニヤリと笑う。

「綺麗に？」

「……昨日のように……」

「どうして欲しい？」

「か……、浣腸……して」

「はっきり言ってみなよ」

「……麻美に、浣腸して……下さい……」

平尾が、汚れた指先を彼女の乳房にこすり着け、テーブルの上から浣腸器とグリセリンの瓶を取る。

麻美が嘆きの声を上げた。

「脚を広げろ」

麻美の背後で、グリセリン溶液を満たした浣腸器を持った平尾が言った。

「尻をもっと突き出せ、お前の尻の穴がよく見えるようにな」

「うう……」

麻美は、吊られた腕を精一杯に伸ばして、脚を転げ、腰を後ろに屈める。だが、腕の筋が浮く

ほどに伸ばしても、平尾を満足させることは出来なかった。

平尾が床に転がっている鞭を取り上げる気配に、麻美が哀願する。

「イヤ、もう叩かれるのはイヤっ。お願い、無理なんですこれ以上は」

麻美は許せる限り太股を広げ、尻房の狭間を剥き出しにしようとする。そんな淫らで滑稽な彼女の格好に、薄い笑いを浮かべた平尾が鞭を振り上げ、尻に向けて打ち下ろす。

鋭い鞭の音が鳴り響き、麻美の悲鳴があがる。

「そら、どうした麻美！」

平尾が楽しげに笑い、再び鞭を振る。

鞭が尻を激しく轢す度に、彼女は懸命に腰を突き出す。

「お願い、無理なんです、無理……。あっ！」

平尾が半ば左右に広がり、その奥の二つ肉穴の姿を僅かに覗かせている尻の狭間に向けて鞭を振り下ろした。

柔らかく繊細な粘膜を打ち据えられた彼女は、絶叫の声を上げ、再びそこを打たれる恐怖に腰を限界以上に後ろに向けて突き出した。

引きつる程に伸び切った腕で鈍く微かな音が鳴った。

「やればできるじゃないか」

平尾が、開いた彼女の脚と尻房の狭間を見詰め、鞭をテーブルに置いた。

「うう……」

爪先立ちになるほどに脚を広げ、腰を突き出している彼女の姿を平尾が背後から見詰める。

「……は、早く……早くしてください」

無理な姿勢に脚を震わせる彼女がうったえる。

「ほう、今度は浣腸のおねだりか？ 昨日の夜教えてやったばかりなのに、もう味を覚えたらしいな」

「そんな……」

「違うのか、じゃもう暫くそのままにいるか？」

「うう……」

「どうした？ それとも姿勢を崩してまた鞭を受けたいのか？」

「……いや……鞭はいや……。早くして、早く麻美に浣腸してください……」

彼女の言葉に、ふっと満足げに笑った平尾が、テーブルの上から麻繩を取り上げ、彼女の片方の脚の膝関節に巻き付ける。

「なにを……？」

脅えた瞳で、麻美が見詰める。

平尾は、麻繩の端を天井の金具に通し、その端を下に向けて引きはじめる。繩に結ばれた麻美

の片方の脚がゆっくりと吊り上げられ、それにつれて股間が大きく開かれていく。

「ああ、イヤっ、イヤ」

股間の2つの箇所を無残に晒け出されていく感触に彼女が声を上げ、既に腹の辺りまで吊り上げられたってしまった脚を、抵抗に振る。

麻縄のさらついた感触を肌に食い込ませながら、平尾は、徐々に剥き出しにされていく彼女の股間を見詰める。

吊られた脚の膝関節が、乳房に触れる程になった時、麻美の声に苦痛のうめきが混じりはじめた。

既に彼女の股間は鈍角に開かれ、股関節の腱が張り詰めかけている。

「痛いです……、もう、もうダメ……」

「さつきも同じようなことを言ってたよな、お前」

平尾がニヤリと笑い、更に縄を下に強く引いた。

「ヒッ……」

股の間節が軋みを上げ、その苦痛に麻美が身体をのけぞらす。

平尾が彼女の片脚を吊り上げている縄の端を、天井の金具に結び付け、脚を目一杯開いたままの状態で固定する。

平尾が屈み込み、引き裂かれる程に開き切っている彼女の股間を下方から見上げる。

「麻美、お前のここ、どうなっていると思う」

平尾が無残な程にむき出しになっている性器に指を伸ばす。粘膜をなで上げられたとき、彼女の脚がピクンと震えた。

「パツクリと口を開いて、中の奥の方のピンク色まで見えているぜ……、それに、ここも……」

平尾の指が、外側の肉壁が開き切っている為に、形を際立たせている陰核に触れ、軽くつまみあげる。

「あっ……」

平尾が見詰めるなか、膣穴が窄まり、奥からからじわりと透明な滴りが滲みだしてくる。

「濡らしやがって……」

平尾が陰核を軽く指の間で揉みはじめる。

「あっ、あっ、あっ」

麻美は、指で陰核を廻られる度に、小さく途切れるような声を上げ、身体を小刻みに震わせる。その様はまるで、指先によって操られる、淫らなマリオネットのようであった。

平尾が、指の間で次第に固くなっていく陰核と、それに伴って愛液を吐く膣穴を見詰める。麻美の息が乱れはじめる。

平尾が陰核への愛撫を止めると、麻美が短く声を上げた。

平尾は、膣穴から滲んだ白濁しはじめている濃い愛液を指先に掬い取り、肛門の窄まりに塗り付ける。

「ほら、もうすぐだぜ。お前の望みどおり浣腸をくれてやるからな」

「うう……」

「ほう、泣くほどにうれしいか」

平尾が低く笑い、そしてグリセリンが満たされた浣腸器の先端を、愛液で濡れた肛門に触れさせる。

「あっ……」

冷たく固いガラスの感触を、敏感な粘膜で感じた麻美が小さく声を上げると、肛門が挿入を待ち望むように収縮した。

平尾は、先端で柔らかな窄まりを廻りはじめる。

ふつくらと盛り上がり、愛液のぬめりに濡れた淡い肉が、ごく浅く挿入されたガラスの管によってネチネチと弄られると、麻美は、秘めた肉穴の入り口に今まで感じた事のない奇妙な感触を覚える。

「……」

無意識に彼女が腰をくねらせ、ほぐれた窄まりがよりいっそう柔らかくなっていく。

「感じるのか？」

平尾が囁くように問うが、それは答えを期待しない問いだった。

「感じているの？ わたし……」。

麻美が自問する。その途端、平尾の狙いどおりに彼女の中で、感触がはつきりとした快楽に変貌した。

「あっ……」

思わず漏らしてしまった熱い声を麻美は押さえ込むが、廻られる窄まりのすぐ上の膣穴からは、一筋の透明な愛液が滲み出し、短い距離を伝ってガラスの管にしたたかった。

平尾が浣腸器を進める。

「ああ！……」

麻美が喘ぎを漏らす。

ノズルが押され、グリセリンが注腸されはじめると、麻美は反射的に尻の筋肉を震わせた。

侵入して来る冷たい液体に身体を犯されていくような感触。決して馴れることがないだろうと思われる、その奇異な感触に表情を歪める。

平尾が全ての薬液を注入し終え、彼女の尻から離れた時、既に感じはじめていた下腹部の圧迫

感に、肛門が強く窄まった。

「あつ、もう……、もう駄目……」

片脚を吊り上げられた、無理な姿勢を取らされている為に、彼女はすぐに重い苦痛を訴えはじめる。

平尾の視線の中で、愛液と、微かに漏れだしたグリセリン溶液で濡れた彼女の肛門がヒクヒクと蠢く。

「ダメ、もう。お願い」

麻美が泣き出しそうな表情を浮かべ、薄く笑いながら自分を見詰める平尾に哀願する。

平尾がテーブルに置かれた肛門栓を取る。

「フフ……、こいつもお前にはお馴染みの道具だったよな」

平尾が、麻美の股間でこれ以上ないほどに剥き出しになり、細かく忙しない痙攣を繰り返した肛門に栓の先端を触れさす。

「ああ……」

麻美が、その残酷な器具が自分に与えるであろう苦痛を思い、低く嘆きの声を上げた。しかし平尾は、その声の中に微かな安堵感が混ざっている事を敏感に感じ取った。

平尾が強く肛門栓を押し付ける。

「ぐっ……」

麻美が喉の奥から絞り出すような声を上げ、あまりに強い彼の動きに、内臓を押し上げられるような鈍く重い苦痛を感じ、顔を歪める。

「腹の力を抜いて、息を吐け。昨日も教えただろうが、尻の穴、裂けちゃうぜ」

平尾が、更に強く肛門栓を押し上げ、彼女が大きく息を吐く。

「あっ！」

麻美が短い悲鳴を上げた瞬間、引き裂かれるかのように広がった肛門が、栓を受け入れた。「これで暫くは大丈夫だな、暫くはな……」

平尾が、麻美の白い尻の狭間に生えたように埋まる栓を見詰める。

麻美の前に回った平尾が床に膝を付き、見上げるような格好で、彼女の開き切っている股間に両手を伸ばす。

指が、内部の桜色の部分を半ばさらけ出している性器に触れ、その左右の肉襞を摘まむ。

麻美が、苦痛に顔をしかめる。

「昨日縫ってやった傷がまだ治っていないな、腫れているぜ」

平尾が、再び昂ぶりだした声で囁き、指でつまんだ肉襞を強く左右に捲り上げる。粘膜が張りを見せ、鈍い光を放つ。押し広げられた粘膜に引かれるようにして陰核の包皮がずり下がり、

内部の瑠璃色をした突起の先端が覗く。膣がわずかに口を広げ、その奥の湿り気を帯びた繊細な秘肉がむき出され、ポツリとした尿道口が縦長の円となる。

「内臓まで見えそうだけ……」

平尾が興奮に掠れた声で囁く。

「イヤ……、イヤ、イヤあ……」

彼女が、早く小さく首を振り、身体を揺らす。

平尾は指で摘まんだ肉壁を更に強く捻り上げ、引き裂くような勢いで更に左右に割りつて、その口を開いた部分に顔を寄せる。

「ひっ……」

彼女は、傷ついた肉壁を捻り上げられる痛みと、膣の内部に挿し込まれてきた平尾の舌の感触に喘ぐ。

平尾は、微かな汗の香りと、生臭さ、そして乾きはじめている愛液が、自分の唾液によって再びぬめりはじめる感触を味わい、顔を性器に押し付け、更に深く彼女の奥をまさぐる。舌尖に、浅い部分とは違った粘膜の感触が触れる。微かな鉄の味がするのは、先程爪を立てた部分であった。

舌尖で膣穴の内部の上の部分を押し上げるように舐めると、まるで条件反射のように秘肉が反応し、舌に新しい愛液の味が乗った。

平尾が、両手をつかんでいた彼女の太股から離し、後ろに伸ばした手で2つの尻房に触れ、その張り詰めた手触りと弾力を楽しむ。

麻美が、自分の秘めた部分のその最深部を舐められると言う搔痒感にも似た感触と、自分の心の奥底に潜む淫らさを、無理矢理に引きずり出されるような気分を味わい、恥辱とおぞましさと、そして沸き上がる淫らな快楽に戸惑い、すすり泣く。身体が細かく震えはじめ、天井の金具が軋む。吊られた足の指がヒクヒクと痙攣する。

膣穴が窄まり、舌に断続的な締め付けを感じた平尾が舌を抜く。

その途端彼女は、性器にどこか虚ろさが残る感じを覚える。意識の外に押し出されていた下腹部の苦痛が復活し、先ほど以上に彼女を責めはじめ。

平尾がテーブルの上からバイブレーターを取った。

指が彼女の陰核の包皮を根元にまで押し下げ、艶々とした肉の突起を剥き出しにする。

「うっ……」

麻美の唇から低い声が漏れ、その声にスイッチを入れられたバイブレーターのモーターの音が混じった。

細かく、そして早く振動するバイブレーターの先端が、彼女の剥き出しにされた陰核に触れた。

「あつ！ ああ！」

麻美が叫び、大きく身体が震える。その瞬間、下腹部から今まで以上の強い苦痛が襲いかかり、彼女は内臓を絞りあげられるような苦痛を味わう。

苦痛と快感、その本来別種であるべき感触が、同時に彼女の身体の中を突き抜け、引き裂く。股間の二つの箇所から生じるその感触は、電光のように背骨を這い上り、吊られた身体を痙攣させ、悲鳴と、そして快感の喘ぎとなって唇から迸り出る。

膣穴から白濁した愛液が滲みだし、肛門に埋められた栓がヒクヒクと揺れ、その動きに連動するように窄まった膣の括約筋が愛液を押し出し、陰核を蹴るバイブレーターの表面をぬめらせていく。

平尾は陰核を刺激しながら、バイブレーターの亀頭の部分で、彼女の膣の浅いところを蹴りはじめ。愛液の短い糸が黒いゴムの表面に絡まり付き、平尾がくねらすように動かす度に、淫らな濡れた音を立てる。

膣穴が蠢き、バイブレーターをまるで包み込むかのように動きはじめる。

麻美の声と息が切羽詰ったものに変化し、自分でも意識しないうちに、彼女は腰を前後に振りはじめ、性器を蹴るバイブレーターに膣口を擦り付けようとする。

平尾が、手をわずかに引いて、その彼女の無意識の動きを遮る。

「イヤ、……、イヤ、イヤ、イヤあ」

麻美がうわ言のようにくり返し、すすり泣く。

平尾が肛門栓をつかみ、乱暴に上下に動かしはじめる。

「グ……」

麻美が重い苦痛に喘ぐ下腹に圧迫を感じ、身体をよじらせる。そのとき、平尾がバイブレーターをすつかり固くなっている陰核に押し当て、強い快楽を送り込んだ。

「ああっ！」

麻美が叫ぶ。

そして平尾は更に大きく肛門栓を上下にゆすりながら、激しく震動するバイブレーターで陰核を押しつぶす。

麻美の上げる声が悲鳴に変わった。

「狂う、狂っちゃう！ 気が狂う、狂うわ！ ああ！ ああ！ ああ！」

吊られた不自由な身体を激しく悶ええさせる麻美の、まだ狭い膣を引き裂くかのように、平尾が一気に深くバイブレーターを挿入し、内部を激しくかき回した。

その瞬間麻美は全身を跳ね返らせるように硬直させ、熱い息と大きな絶頂の叫びを張り上げる。天井の金具が外れ、平尾の足元に麻美が崩れ落ちた。

*

快樂の余韻の中で、下腹部から激しい苦痛が込み上げてきた。

見下ろす平尾の視線の中で、身体を胎児のように丸めて横たわる麻美の剥き出しの腰が、荒い息遣いの音と共に細かく痙攣している。

両手を手錠で拘束されたままの彼女が、床に肘を付いて不自由な上半身を起し、わずかに潤んだ瞳で平尾を見上げる。

「お願い、おトイレに行かせて……」

平尾が麻美の瞳に、視線をまっすぐに当てる。

「お前の出す所を見るぞ」

彼女は一瞬だけ視線を下げ、そして再び上がった顔が微かにコクリと肯く。

だが平尾は、そんな彼女の精一杯の態度を平然と無視する。

「どうした？」

「……苛めないで……もう、そんなに苛めないで……」

「苛めた？ おれがか、ハハッ、浣腸器で尻の穴を髒られて濡らしたのはいったい誰だ？ 浣腸

された尻を髒られて、バイブでイッタのはいったい誰だ？」

「……」

麻美が唇を噛む。

「誰だと聞いているんだ！」

「……わたしです……」

うなだれた彼女が、囁くように言う。

「……いいわ、見て……、見てください……」

平尾が薄い笑いを浮かべ、彼女の両手首を結んでいる手錠の鎖をつかみ、立ち上がらせる。

「トイレはあそこだ」

手錠を外した平尾が部屋の奥にあるドアを示すと、彼女は切羽詰まったようにトイレに向おうとする。

その腕をつかんだ平尾が言った。

「待った。そのスカート、邪魔だろうが、脱いでいけよ」

抵抗する気も失せた麻美が、下半身に纏わり付くスカートのホックを外し、脱ぎ捨てる。

「これでいいですか？」

「ああ、いいぜ」

平尾が、ボタンを外され着崩れた制服を上半身に着け、裸の尻をむき出しにする彼女の姿を見下ろしながら答える。

腕を放された麻美が、トイレへと向かう。

その鞭跡の残る剥き出しの尻の狭間に、黒い肛門栓が揺れている。

再び鞭を取った平尾が、彼女のすぐ後ろに続く。

黄色っぽい照明に明々と照らしだされ、湿った湯の匂いのこもるユニットバスの中に麻美が入り、開けられたままのドアのすぐ後ろに平尾が立つ。

バスタブの横に据えられた洋式便器に、彼女が腰を下ろそうとした時、平尾が言った。

「尻を下ろさないで、便座の上にしやがむんだ。オレに、お前の尻が良く見えるようにな……」

一瞬平尾を見た彼女が視線を逸らし、諦めたように小さく肯く。

便座の淵に白いソックスにつつまれた足が乗り、彼女が腰を深く落とすと、白い瑛瑯の上に、鞭跡も生々しい尻房が2つのクロスするカーブを描き、腰骨から尻へと続く女の曲線が強調される。

左右に開いて剥き出しとなった尻肉の狭間で、黒い肛門栓がビクリと揺れ、その向こう側の、淡い敏感な肉の奥までを晒け出す性器が、再び愛液に濡れはじめた。

平尾は、その彼女の滲ませる欲情の露を見た瞬間、強い欲情に囚われる。

鞭を持つ手が大きく振り上げられた。

空気を裂くような鞭音がし、便器の上の尻で弾ける。バスルームの中に鋭い音が響く。

「あっ！」

麻美が声を上げ、尻をくねらせる。よじれた性器の肉襞の狭間から、濃く粘っている愛液の粒が膨れ上り、糸を引きながら落下していく。

平尾が再び鞭を振り上げた時、背中でのその気配を感じた麻美が、前から回した手で肛門に埋った栓をつかんだ。

尻を打たれる度に小さな悲鳴で反応しながら、彼女はゆっくりと肛門栓を抜き出していく。既に大きく捲り上がっている肛門は、そこに埋まった栓を手で引きずり出されるよりも前に、内からの圧力によって押し出しはじめている。

「うっ……、ああっ！」

麻美が、鞭の苦痛と排泄の恥辱、そしてどうしようもなく股間の中心から沸き上がる快樂の中で声を上げ、そして放出する。

固く閉じられた瞳よりも、更に強く肛門栓を握り締める彼女の手の指が白くなっていた。

三度訪れた大きな排泄の波に下腹部を引き絞られた麻美が、ぐったりと身体の力を抜き、前の壁に手をつけてまだ屈み込んでいる身体を支える。

まるで激しいセックスの後のような、何処か満足気な溜め息がその喘ぎの唾液に濡れた唇から漏れだす。

平尾が彼女の背中に言う。

「シャワーを使って、綺麗に洗え」

乱れた息に細い肩を上下させる彼女が、気もそぞろに肯くと、平尾はバスルームのドアを閉じた。

麻美が、大きなタオルで身体を覆った姿でバスルームから出てきた時、平尾は全裸となった姿でベッドに仰向けに横たわっていた。

ベッドのすぐ横にはガラステーブルが引き寄せられており、上に乗せたままの淫らな道具越しに平尾が彼女を見詰める。

「バスタオルを取れ」

彼女は躊躇する事なく、身体を覆ったバスタオルを床に落とし、全裸をさらけ出す。浴びた湯の為に、ほのかなピンク色に火照った肌に、薄く翳るような陰毛の黒が浮き出す。乾いたままのショートヘヤーが、細く小さな肩の丸みの上に触れ、首の優雅な線は、まだ大人の女になり切っていない乳房へと続く。その膨らみは、薄く脂肪の乗ったなめらかな腹部へと続き、縦長の臍がワンポイントマークのように息衝いている。

麻美が自分を舐めるように見詰める平尾の視線に、豊かな腰のラインを恥ずかし気に震わせると、その下の長い目の太股が交差し、彼の視線が集中する鼠蹊部の肉の合わせ目を隠す。

「今更隠してどうする。もうオレはお前の全てを見ているんだぜ」

「……」

「尻を見せろよ……」

麻美が身体を回し、背中を向ける。

流れるような曲線を描く背骨の線に続く、若い筋肉に支えられた2つの尻房の豊かな膨らみが平尾の目を射る。

「振って見せろ」

一瞬躊躇してから麻美が、尻を不器用に揺すりはじめ。丸い豊かな膨らみを持ったなめらかな肌に、赤く縦横に刻印された鞭跡が揺れ、それを見詰める平尾の陰茎が勃起しはじめた。

「来い」

平尾が言った。

ベッドの傍らに歩み寄ってきた彼女が、すぐ横に置かれたガラステーブルの上の陰具に脅えた瞳を向ける。

太い性器用のバイブレーターと、それよりも幾分か細い肛門用のバイブレーター、待針、金属性のクリップ。

それらの道具が今から自分の性器と尻と、そして肛門に使われるのだと言う事を意識した時、彼女の股間に妖しい感触が蠢いた。

それを振り切るように顔を背けると、平尾の勃起した陰茎が目映る。

固く張り詰めている亀頭。節くれだった竿の部分に浮き出している血管。彼女は、昨夜それを舐めさせたときの事を思い、尻の中に押し入ってきた時の感触を回想する。

微かに息が乱れはじめた。

彼女のそんな視線を意識した平尾が、更に陰茎を固くする。亀頭が赤黒く鈍い光を放ち、男の匂いが香りはじめる。

「舐めろ」

平尾が命令する。

麻美が床に膝を付き、平尾の下腹部に覆い被さるように身体を倒していく。

下腹に触れる麻美の髪の毛の感触。太股に置かれた手、陰茎に吹きかけられる熱い息、そして亀頭に絡みつく、温かく濡れた舌の感触。

平尾が快樂の息を吐き出すと、彼女の舌が、張り詰めきった陰茎の表面を這い、先端の小穴から滲み出してきた粘液の味を感じる。

平尾の手が、下腹部でゆっくりと動く彼女の頭に触れ、髪を乱す。

「唇で強く締めて、上下に扱くんだ」

その言葉に従って、彼女が頭を上下に振りはじめる。

「……吸って、舌で舐め回せ」

感じる快感に顔をしかめた平尾が、昂ぶった声で続けて命じる。

肉の剛直のように突き立つ陰茎を啜えた淡い唇と、染まった頬が窄められ、淫らな音が鳴った。

平尾の手が強く麻美の頭をつかむ。

「そのまま、啜えたまま、ベッドに上げれ……」

命じられるままにベッドに乗った麻美が、平尾の胸を跨ぐようにして逆さまに身体の上に乗る、尻と、その狭間の二つの肉穴を彼の目前に差し出す。

口の中の陰茎が更に固くなった。

念入りに洗ったのだろう、わずかに赤く脹れている彼女の性器と肛門からは、石鹸の香りが匂った。

両手を上げた平尾が、中央の狭間に二つの秘肉を挟み込んでいる尻房をつかみ、更に強く左右に割り開く。

「うう……」

陰茎を咥える唇の端からくぐもった声を漏らした彼女が、視姦される恥ずかしさに腰を揺すつた。しかしそれは秘肉を蠢かせる結果となり、更に平尾の目を楽しませた。

麻美の尻を平尾の手が撫ぜ回しはじめる。軽く立てた爪で、尻の表面を摩るようにすると、その感触に腰が更に揺れる。

麻美の吐く低い声が股間にかかり、亀頭に歯が触れた。

平尾が、既に愛液の兆候がある性器の、外側の肉襞に両手の親指を当て、膣口を取り囲む繊細な桜色の粘膜をめくり上げるようにして剥き出しにすると、耐え切れなくなつたのか、彼女が尻を後ろに向けて突き出す。平尾の目前で、性器が石榴のように割れ、その奥の膣口を弾けさせた。石鹸の香りの向こうから、雌の匂いが漂いはじめる。

平尾が右手の親指を膣穴に挿し込む。狭い膣管の濡れた粘膜のぬめりの感触と暖かさが指にまとわりつき、前の4本の指で陰核の尖りを刺激すると、うねるように指を締め付けはじめた。

陰茎を咥える麻美の口の動きが大きくなり、舌が粘液を滲ませる尿道をまさぐる。平尾が親指の腹で膣壁を廻りはじめると、持ちあがってきた陰核の尖りが指に触れ、愛液が手にしたり落ちた。

平尾が片手で膣穴を弄りながら、もう片方の手で、ベッドの横のテーブルの上から待針を取り上げる。それを視線の隅で見た麻美が、悲しみとは違った低い調子の声をもらし、強く陰茎を吸いはじめた。

「うう……」

強く粘液を吸い出される快感に平尾が表情をしかめ、待針を目の尻房に刺す。

「あっ！……」

麻美の上げた声が勃起した陰茎に降りかかり、その瞬間、膣穴がビクリと親指を締めつけてくる。

浅く尻肉に刺さった待針の先端の、赤いプラスチックの玉が震え、傷口から少量の血が流れ出す。白い尻の表面に一筋の朱が糸を引いていく。

平尾の手が、更に待針を求めてテーブルにのびる。

膣穴から愛液に濡れた指が抜かれた時、彼女の尻には八本の針と、傷口から流れ出した細い血の線で飾られていた。

平尾は、そんな嗜虐に充ち淫らで、そして美しい光景を見詰めながら尻房を両手で撫ぜまわし、性器の両端に当てた親指で既に内側をさらけ出している秘部を更に大きく開く。

濡れた膣口が裂かれるように割れ、肉穴の奥のぬめった秘肉が弾け出す。

「うう……」

身体の奥底の更にその奥までをも覗姦される麻美が恥辱にすすり泣く。しかしその声にはどこか快樂の調子が潜んでいた。

他人には決して見せたくはない秘密の全てを覗き込まれ、犯されていく感覚。身も心も男性に支配され征服されてしまった感じ……。だがそれは、一種の喜びでもあった……。

縦長に裂かれた膣穴から、流れるように薄い愛液と白濁した濃い粘りの交じり合ったものが滲み出し、平尾の手に滴り落ちる。

それを見詰める平尾が、彼女の尻を引き寄せ、その尻肉の狭間に顔をよせていく。

「あああああつ……」

ぬるりとした感触とともに、平尾の舌が挿し込まれてきたとき、彼女はついに長く後を引く快樂の声を上げた。

興奮と昂ぶりによって充血し、火照っているだろう膣壁を舐めまわされる感触、内側の肉の突起の一つ一つの形をまさぐるようにくねる舌の動き、外側の肉襞に押し付けられた鼻先が吐く荒い息。そして太股に感じる彼の短く伸びはじめている髭の感触。

腰がそうしようともしていないのに淫らに動きだし、脚の狭間の顔を太股が締め付ける。上半身が、股間からのどうしようもない快樂によじれ、勃起した陰核から唇が離れる。

麻美が喘ぐ。

声と彼女の「味」を堪能した平尾が顔を離す。

舌が抜け出した後の膣穴が、したりを零しながらゆっくりと閉じていく。その様子を薄笑いを浮かべながら見た後、彼は麻美の肛門に舌で触れた。

「あつ……、そんなところ……」

ビクリと彼女の身体が震え、感じた舌先に窄まりが蠢く。

細く尖らせた舌先で窄まりを軽く突つくように愛撫しながら、平尾が奇異な快感に蠢く尻をつかみ、そこに刺さっている針を一本一本と抜いていく。

全ての針を抜き終えたとき、彼は丸めた舌先を強く押しつけた。舌先が窄まりの中に浅く埋まると、麻美が激しく反応する。

「ああっ！」

「尻の穴を舐められて、そんなに気持ち良いのか？」

一旦舌を離れた平尾が意地悪く問う。

「うう……」

「聞いているんだぞ」

「……は……はい……」

「は、どうした？」

「……はい……気持ち……いいです……」

平尾が再び彼女の肛門に舌を押し付け、そしてその指が、愛液で塗れ光る肉襞の上端から顔を突き出して陰核をつまんだ。

「あぁっ！」

平尾が指の間に挟み込んだ肉の尖りを軽く押しつぶすようにしてこね回しはじめと、最後の一线を超えたかのように、麻美が快樂の喘ぎを叫び、身体を大きくよじりはじめた。

舌先でこね回される窄まりが柔らかくほぐれ、ふっくらとした丸みを浮かび上がらせた頃、平尾がベッドの横のテーブルから性器用のバイブレーターを取った。

固くつめた先端を、濃く粘りつくような愛液を垂れ流し肉襞にまわりつかせている膣口に当て、一気に挿入する。

「うっ……」

重い声が麻美の腹の奥から漏れ出す、尻の快樂によってほぐれきっていた彼女の膣穴は、まだ最近まで処女であった事など信じられない程にたやすく陰具を受け入れた。

一旦奥の女の器官に触れるまで深く突き入れたものを、平尾はゆっくりと抜き出し、その表面に粘りつくような膣穴と肉襞の蠢きを楽しむ。

バイブレーターを半ばまで抜いた時、平尾がスイッチを入れる。

低い音を上げながら細かく震動するものによって与えられる快樂に、麻美が悲鳴に近い快樂の声を上げ、そして膣穴が食いつくように陰具を締め付ける。

平尾がその、女の本能そのものに淫らな膣穴の肉の粘つきを引き剥すように、バイブレーターを前後に動かしはじめる。

平尾の身体の上で、彼女の身体が激しくよじれはじめ。

浅く深く、そしてじらせるように快樂の鈍い奥を陰具の先端で騷る平尾、そして彼に操られるようにすすり泣き、快樂に身体を波打たせる麻美。陰具と秘肉の狭間で鳴る淫らな肉音。

平尾は、決して彼女に短い絶頂さえも与えない絶妙の手つきで陰具を操り続ける。

いつしか、与えられる満足感のない快樂に麻美は痴呆のような顔つきとなり、何ものにも例えようのない肉の欲望に捕らわれていく。

「……お願い……、あぁ、お願い……」

指先でつまみ上げられるかと思うほどに、濃く白濁した愛液の粒を滲ませる彼女の膣穴に平尾が伸ばした舌先を触れさせた。

「うう！」

そんなわずかな刺激にも彼女は敏感に反応する。

「……お、お尻……お尻も……お尻にも……シテ……。お尻騷って……」

喘ぎの息が入り混った途切れ跡切れの声、欲情に我を忘却し、快樂と欲望の充足のみを求める

牝の囁き。

平尾はそんな麻美の声に、今まで押さえつけていた昂ぶりの感情を開放する。

快楽を求めて蠢く尻に鋭い平手が飛んだ。見事な音に麻美の短い悲鳴が重なり、白い尻房に赤い手形が浮き上がる。尻が苦痛と快楽に蠢き、煽られる事を望む小孔の窄まりがヒクヒクと震える。

平尾がテーブルから肛門用のバイブレーターを取り、窄まり浅く埋めた。

「ああ！」

麻美が尻の快楽に喘ぎ、膣穴を犯す陰具を食いちぎるほどに締め付ける。

「自分で入れてみる。淫らな尻を振って、自分で受け入れろ！」

平尾が半ば叫ぶように言うと、麻美が彼を跨いでいる脚をすべらせて尻を動かしはじめる。

淫靡な尻の快楽をその瞳に湛えながら、尻をたどたどしく振り、肛門でバイブレーターをまさぐるのその彼女の姿は、あまりにも淫らなものだった。

平尾は沸き上がる欲情のままに、彼女の尻房を数回平手で打ち、白い肉が赤く火照り出すと、ねじ込むようにしてバイブレーターで肛門を犯し、スイッチを入れた。

「！」

二つの快楽の個所に同時に陰具を受け入れた麻美が、声にならない声を上げ、その快楽にのたうつ。

だが、その彼女の悦楽の時もすぐさま終わった。

平尾が、膣穴のバイブレーターをくわえ込む秘肉を引きむしるようにして、抜き去る。

「イヤっ！」

麻美が絶頂の間近で奪われた快楽に泣き、平尾を振り返る。

「……何故、何故？　お願い、お願いですから……」

すすり泣きながら彼を見る麻美に平尾が言う。

「本物があるだろうか」

麻美が、目前でそそり立っている陰茎を見る。瞳が陰媚に輝いた。

「自分で入れて見せろよ……」

「……ああ……」

押さえ切れない昂ぶりに一声悲しみの声を漏らした後、麻美が後ろ向きのまま両手を平尾の膝辺りに付け、自分の下半身を引き上げる。張り詰めた亀頭の真上に尻を持ち上げ、その狭間の膣穴の真上にくるように手を陰茎に添える。

その後ろでは平尾が、彼女の肛門に埋ったバイブレーターを抜け落ちないように更に深く押し込む。

腹の中に深く入ってきたその感触にうめきを上げながらも麻美は、膝を曲げて腰を落とし、握っ

た陰茎を自ら膣穴に挿入していく。

その様を見詰める平尾が、亀頭を包み包みんでくる、柔らかで暖かな彼女の膣の感触に低い快樂の声を上げる。

完全に挿入を終えた時、満足そうな声を上げた彼女が腰を彼の下腹部に押し付け、深くえぐり込むように回す。

「ああ！ イイ、イイのっ！」

快樂の叫びを上げた麻美が、尻に埋められたままのバイブレータの為に、前屈みになっている身体を揺すり、たどたどしく尻を上下に振りはじめ。

平尾が、麻美の肛門に埋ったバイブレータをつかみ、前後に動かしはじめる。膣の中の陰茎に、細い肉壁の向こうからバイブレーターの動きと振動が伝わり、快樂を助長していく。そして麻美のたどたどしい動きが、かえって彼の欲情を煽った。急激に込み上げてきた射精の衝動を彼が押えつけ、麻美の上下に動く尻をつかむ。

「ああ、ダメ……」

止められた快樂に麻美が囁き、その背中に平尾が言う。

「入れたまま、こっちを向け」

「え？……」

「腰を回して、オレのものを咥えこんでいるお前のものを見せろ」

彼女はすすり泣くような声を出しながらも、腰を回しはじめる。浮いた尻の狭間から陰茎が抜き出しそうなる。

「ダメ……出来ない……、出来ないの……」

「やれ！」

強く命じられると、彼女は再び腰を回した。

愛液で濡れそぼった陰茎が抜け出す。

「イヤっ……」

落胆の声を漏らした彼女は、完全に平尾に向き直った後、再び陰茎をつかみ自ら挿入する。

「ああ……」

思わず射精してしまいそうになる程に妖艶な表情を浮かべ、彼女がわずかに開いた唇を舌が舐める。

腰が前後に動きはじめた。

「開いて見せろ」

平尾の命ずるままに彼女が、愛液に濡れた陰毛が張り付いた肉壁に両手を添え、左右に引っ張り、陰茎を咥えこんでいる膣穴を剥き出しにする。

粘膜が鈍く光り、細い指と指の間では、生殖器の上端で勃起した陰核が、先端からわずかに内部

の瑪瑙色を覗かせていた。

平尾が手を伸ばし、陰核を摘まみ上げる。包皮をずり下ろし、艶々とした肉の芽を外気に晒す。麻美の腰の動きが速くなる。

ギンギシと軋むベッドの上で、陰茎に秘部をこすりつけながら前後に動く麻美の下腹部。上げる悦びの声とよじれる身体。

平尾はそんな彼女を見上げながら、グイグイと締め付けてくる膣穴の快楽に耐える。

限界が近づいたとき、彼の手がベッドの横のテーブルからクリップを取り上げた。それを見た麻美が、クリップがどのようなようにして自分に使われるのかを思い、泣き出しそうに表情を歪め、自分の乳房を驚つかみにして激しく揉みはじめた。

低い肉音を立てながら粘りつく愛液を漏らし、前後に動く彼女の股間に平尾が両手で触れ、秘肉を左右に開き突き立つ陰核を露出させる。

「ああ、イヤ……」

拒否の言葉を囁きながらも、彼女の腰は快楽に操られるように淫らな動き繰り返す。平尾がそんな様子に薄く笑い、広げたクリップで陰核を鉄む。

激しい苦痛に麻美が悲鳴を張り上げ、その瞬間、膣が強く陰茎を締めつける。平尾が腰を突き上げる。

快樂とも苦痛ともつかぬ叫びを上げた麻美が乳房を強く揉み、指の間に挟み込んだ乳首をひねるようにしながら、腰を振りはじめた。

彼女は泣き叫び、激しく膣穴が愛液を吐く。平尾の下腹部はしたり落ちるそれによって濡れそぼり、二人の陰毛が絡まり合う。

麻美が肉欲に狂ったかのように声を張り上げ、上下の腰の動きに、左右の動きが加わり、大きく開かれた唇の端からは、涎が銀色の糸を引く。

強い射精の衝動を感じた平尾が、両手を彼女の尻に当て、その動きを更に強める。彼女の性器と、平尾の下腹部が激しく擦れ、淫らな音とその接点から漏れだす。

奥を突き上げられる度に、彼女の口からは押し出されるような声と息が漏れ、その音に、二人の接合点からの淫音が混じり合う。

麻美の背中が大きく反り返り、太股が平尾の腰を締め付ける。

その瞬間、上を向いた喉からは、声にならない絶頂の喘ぎが発せられ、そして平尾は彼女の絶頂の締め付けの中で激しく射精する。

子宮の内部に、熱い白濁が迸り散る感触に、麻美が全身を快楽に震わせ、よじれた上半身には、薄く肋骨が浮出した。

膣の中の陰茎が、二度目の白濁を放つ。

再びビクリと身体を震わせた麻美が、長く深い息を吐きながら、ゆっくりと平尾の胸の上に身体を倒していく。

平尾が、荒い息を吐く彼女の唇を奪う。

勃起を解いた陰茎が、ぬるりと膣穴から抜け出して行ったとき、その感触にピクリと麻美は腰を震わせる。

平尾の太股に、粘った暖かな感触が伝わり、ベッドの白いシーツに、愛液と精液が混じり合った白濁が垂れ落ちていった。

以下、次回へ